■日　時：２０１９年１２月８日（日）
■場　所：立川教会
■説教題：「『敵を愛せますか？』とのＡ兄の奨励から考えさせられたこと」
■説　教：飯島　信
■聖書新約 マタイによる福音書５：43－48（新 p8）
■讃美歌：255「生けるものすべて」265「天なる神には」

お早うございます。
先週からアドベント、即ち主イエス・キリストのご降誕を待ち望む週に入りました。
前に飾られた 2 本目の蝋燭に火が点（とも）りましたが、これが 4 本全てに火が点った時がクリスマスを覚えての礼拝となります。今年は 12 月 22 日（日）で、その前日には明治学院グリーハンドベルクワイア―を迎えてのクリスマス・コンサートが行われます。現在、夕礼拝に出席し、又夏休みになると訪れる事の多い明治学院東村山高校の生徒達による演奏です。美しいチラシが受け付けに置いてあります。チケットの販売も始まりました。ぜひチケットを買って販売に協力していただくと共に、友人・知人にも案内をお願い致します。

ところで、私の今日のメッセージのタイトルは、先々週行われた「『敵を愛せますか？』とのＡ兄の奨励から考えさせられたこと」としました。このような説教題を付けたことは、牧師になって初めてです。しかし、待降節を迎えてはいますが、A さんの問いかけは、キリスト教を信じる者にとって最も重要な問題を提起しています。牧師として、又一キリスト者として、私もこの問いに真摯に向き合いたいと思います。「あなたは、敵を愛せますか？」とのこの問いにです。

まず、奨励を聞いての感想から申し上げます。
私は、これほど楽しく聞いた礼拝の話しはほとんど記憶にありません。
A さんが話されている途中、何度大きな声で笑ったことでしょうか。
見事なまでの「敵」と思（おぼ）しき部下の語り口の物真似を前に、思わず吹き出してしまいました。話されている間中、聴く私たちは寛ぎ、しかし、しっかり耳を傾けました。話されている時間は短かったのですが、短さなど全く感じさせないほど、誰もが集中していたと思います。
笑いながら、しかし、話が終わった後、私は A さんのこの問題に真摯に応えなければならないと思い始めていました。一人のキリスト者として、避けることなく、必ず、です。そして、今日を選びました。

「敵を愛せますか？」との問いに、「はい、愛せます！」と答えた人、あるいは答えられそうな人を私は知りません。

そうした現実の中で、私が改めて想い起こした聖書の箇所が 2 ヶ所あります。1 か所目は、今日もお読みした新約聖書のマタイによる福音書の第 5 章 45 節の後半です。（p8）
読みます。

４５：父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせて下さるからである。

これは、一体どのようなことかを考えるのです。

「善人に太陽を昇らせ、正しい者に雨を降らせる」なら分かります。しかし、「悪人にも太陽を昇らせ、正しくない者にも雨を降らせる」とはどのような事かと思うのです。
そして、もう 1 箇所です。イザヤ書 40 章 26 節。（p1125）

２６：目を高く上げ、誰が天の万象を創造したかを見よ。
　　それらを数えて、引き渡された方
　　それぞれの名を呼ばれる方の
　　力の強さ、激しい勢いから逃れうるものはない。

目を高く上げて見る。

それは、私たち造られた者の視点から見るのではなく、私たちを創造された方、造り主の視点から見てみよとの意味です。

そうすると、何が見えて来るのでしょうか。

つまり、私たちにとって、と言うより、自分を「善人」と思い込んでいる私たちにとっての「悪人」は、目を高く上げて見た時、創造主、神様から見ても「悪人」であるかどうかなのです。同じく、私たち、自分が「正しい者」と思い込んでいる私たちにとっての「正しくない者」とは、神様から見ても果たして「正しくない者」であるかどうかです。

さらに言えば、100 歩譲って、私たちは「善人」であり「正しい者」であるとしましょう。しかし、その状態は、いついかなる時にあっても、変わらぬ状態でしょうか。自分の心の内を見れば分かります。人を憎み、人と争い、人を妬み、人を蔑む。私たちの心の内には、時として、「善人」でもなく「正しい者」でもない心の状態が頭をもたげて来ます。神様から見て、全き「善人」、完全なる「正しい者」などいないのです。

そのような意味で、神様は、このような神様の前にあって不完全な私でも愛して下さるとするなら、私が「敵」と思っている人々も、同じように愛しているのではないかと思うのです。つまり、神様から見れば、頭からつま先までの「善人」も「悪人」もいない。全てが「正しい者」「正しくない者」もいない。皆等しく、ある時は「善人」となり又「悪人」となり、又ある時は「正しい者」となり「正しくない者」となる。そのように見えるのではないかと思うのです。

そして、そこに貫いているのは、人間に対する無条件の愛であり、その命への肯定ではないかと思うのです。神様から見ての私たちは、勝手にお互いを「敵」と決めつけ、

傷つけ合っている。そのように見えるのではないかと思うのです。
　言葉を換えて言えば、次のようにも言えるのではないかと思います。
　人は皆、この世に生まれ出でたその時、そこには神様からの絶対的な祝福がありました。
　祝福されない命はありません。しかし、私たち人間が、神様から与えられたその命を、その人生を、自らが眞の主に取って代わって「神」となり、自分の思うがままに生きてしまっている。そう思うのです。

　ここまで来た時、今回初めて、これまで分からなかったイエス様の誕生に関わる出来事の一つに、新たな視点が与えられたように思いました。それは、マタイによる福音書第 2 章 18 節の出来事です。
１６：さて、ヘロデは占星術の学者たちにだまされたと知って、大いに怒った。そして、人を送り、学者たちに確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた。
１７：こうして、預言者エレミヤを通して言われていたことが実現した。
１８：「ラマで声が聞こえた。
　　激しく嘆き悲しむ声だ。
　　ラケルは子供たちのことで泣き、
　　慰めてもらおうともしない、
　　子供たちがもういないから。」
　良く知られている嬰児虐殺の出来事です。
　私は、救い主である主イエス・キリストの誕生と同時に起きたこの出来事をなかなか理解出来ませんでした。救い主誕生の喜びの中に、なぜ悲しみが満ち溢れているのかと。しかし、今は、次のように思うのです。
　ヘロデの行った嬰児虐殺は、領主としての自分の地位が脅かされる者が誕生した事への恐れと慄（おのの）きが原因であることは確かですが、それ以上に、神様が祝福している命に敵対し、反逆する出来事でした。それが、人間の世の現実です。神様に敵対し、反逆し続けている私たちです。ヘロデの嬰児虐殺は、その最も象徴的な出来事でした。何の力もない、最も弱い存在である幼児（おさなご）の命を力づくで奪う。これ以上に悲惨な出来事は無いのです。人間の罪の最も深刻な現れであると言えると思うのです。
　しかし、そのような私たちが織り成す現実の眞ただ中に、神は救い主を与えられたのです。ヘロデの幼児虐殺の出来事は、これ以上ない、この世の最も深い闇を現し、イエス・キリストの誕生は、その闇を照らし出す、最も喜びに満ちた出来事であると思うのです。そして、それが、クリスマスなのです。

　「敵を愛せますか？」と言う A さんの奨励から導かれて、改めてクリスマスの深い

意味を教えられました。世に在って、「敵」を愛することの出来ない私たちです。それにもかかわらず、目を高く上げて神様の視点に立つ時、己の不完全さを知り、そうした中で、神様は、その人をもかけがえのない存在として命を与え、人生を歩ませられていることを知ることが出来るように思います。

お互いを、目を高く上げて見る者となりたいと思います。

祈りましょう。